

土器は、どのように読み解けるのか？

講師 藤原 學 ふじわら まなぶ (元吹田市立博物館学芸員、元大阪学院大学教授)

日時 令和7年10月18日（土）

午前10時00分～11時30分

会場 香川県埋蔵文化財センター講習室
(坂出市府中町字南谷 5001-4)

焼物に歴史を語らせるには、どうしたらよいか

古墳時代の土器である須恵器は、初めて冥界で使う使命を持って制作された土器である。このような実用でない土器は、飾ったり、飾らなかったり、高かったり低かったり、とにかく悪さをする。これに立ち向かう考古学研究者は形態論者・編年論者である以上に、先ずは歴史学研究者でなければいけないので、とにかく大変である。

そんなことを考えながら、須恵器生産の場に視点を注ぎ、学んできた69年であった。そんな経験のなか、須恵器の窯から瓦窯を学び、古代・中世・近世・近現代の瓦窯を学び、そして、幕末からの煉瓦窯を学び、ついでに木炭窯を学び、そして実際に須恵器窯を構築して10年余り、須恵器の窯焚きもしてきた。また、つい先月まで昭和期の土器窯を測ってきた。このような成果のなかから、今後、このような研究を進める方が元気になるお話をしたいと思います。
(藤原 學)



定員 40名（申込先着順）
申込方法 電話・メール
メールの場合はお名前、連絡先
を記入してください
電話 0877-48-2191
(平日8時30分～17時15分)
メール
maibun@pref.kagawa.lg.jp
締切 10月17日（金）

藤原 学先生 略歴

1949年（昭和24）生。関西大学大学院修士課程修了。文学博士（関西大学）。吹田市立博物館学芸員・関西大学非常勤講師・大阪学院大学教授を歴任。また、吹田市立博物館の設立に尽力。須恵器をはじめとする古代～近代窯業史が専門。著書に『千里古窯跡群』（共著、1974年）、『達磨窯の研究』（2001年）、『須恵器からみた古墳時代葬制の変遷とその意義』（『末永先生米寿記念献呈論文集』、1985年）、『須恵器の編年』（『古墳時代の研究6』、1991年）、『須恵器生産の展開』（『新版 古代の日本⑤ 近畿I』、1992年）、『通論・瓦窯でみるわが国造瓦の特質と課題』（『瓦窯の構造研究』、2024年）など、多数。

